

氏 名	マツ モト カズ コ 松 本 和 子
学 位 の 種 類	博 士 （音 楽）
学 位 記 番 号	博 音 第 168 号
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉ドビュッシー作曲 ボードレールの五つの詩 他 〈論文〉ヴェルレーヌの詩によるドビュッシーの歌曲 一詩の音楽性との 関わり

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教 授 （音楽学部）	寺 谷 千枝子
（副査）	〃	〃 （ 〃 ）	伊 原 直 子
（ 〃 ）	〃	准教授 （ 〃 ）	佐々木 典 子
（ 〃 ）	〃	〃 （ 〃 ）	ローラン・テシュネ
（ 〃 ）	〃	非常勤講師	園 田 みどり
（ 〃 ）	〃	名誉教授	朝 倉 蒼 生

（論文内容の要旨）

本論文は、クロード・ドビュッシー Claude Debussy（1862～1918）が書いた70曲の歌曲作品の内の20曲を占める、ヴェルレーヌ Paul Verlaine（1844～96）の詩による作品について、詩の音楽性と音楽の関わりを探る試みである。

ヴェルレーヌの詩は音楽的であると言われており、多くの作曲家の興味を惹いている。詩が音楽的であるということは、すなわち朗読したときにその詩が美しく響くということであろう。その美しさは、単に聞き手の耳に心地よいという他に、発音する本人に心地良いという感覚が起こることにより生じる。そして、この発音するときの心地よさは、筆者がヴェルレーヌの詩によるドビュッシーの歌曲を演奏する際に実際に感じた感覚でもあった。本研究の目的は、この心地よいという漠然とした印象を、詩の分析及び作曲過程の考察という段階を経て再構築することで、より優れた演奏解釈につなげていくことである。

本論文は3章で構成され、まず本論文の研究対象をより広い視野から捉え、徐々にクローズアップする形で研究を進めるものである。

第1章ではまず、フランスにおける歌曲の歴史を辿ることで、フランス近代歌曲というジャンルが生まれた経緯を確認した。その結果、メロディ（フランス近代歌曲）は、様々な分野の芸術の融合という、19世紀のフランスにおける芸術の特性と切り離せない関係にあることが明らかになった。ロマン主義から写実主義へと移行して行く19世紀フランス文学の流れに現れた象徴主義の詩は特に作曲家たちの創作意欲を刺激したが、ドビュッシーはこれらの作曲家たちの中であって、最も文学の潮流に敏感な作曲家であり、彼によってメロディはその頂点を迎えたのである。

第2章では、ドビュッシーとヴェルレーヌの生涯と創作を追うとともに、ヴェルレーヌの詩の特徴である音楽性について考察した。その結果、ドビュッシーの文学への傾倒という特質が、環境から得られた受動的なものではなく、彼が自ら知的好奇心を満たそうとした結果であり、文学が、芸術的靈感を得る上で欠かせないものであったことが分かった。また彼が作曲を始めた時期のほとんどの作品が歌曲であり、ドビュッシーにとって、歌曲作品はその作曲活動の根源に位置する、欠くことの出来ないジャンルであったことが明らかになった。続いて詩人ヴェルレーヌの生涯と詩作を追った。彼の資質は多くの

点で両義的であり、性格的にはきわめて優柔不断で、その人生は破滅的であったといっても過言ではない。そのような生涯から、最も美しい詩句を含む多くの傑作が誕生したのであるが、ヴェルレーヌの詩を最も特徴付けるのは詩に現れる音楽性、すなわち言葉の響きの美しさであることが分かった。更に詩の音楽性について検証した結果、詩により音楽性を与えるのは、伝統的な偶数音律ではなく、不安定な印象を耳に与える奇数音律であり、詩句の内容そのものより、言葉の重なり合いによって生まれる「灰色の歌」こそヴェルレーヌの求める詩の形であることが分かった。更に、耳に心地よいと感じる詩句を定義付けるために、律動と諧調という二つのキーワードをもとに、更に詳しい論証を試みた。律動は、フランス語特有の律動強張音によって詩句の中に生まれる緊張である。また、諧調は詩句における母音と子音の均衡により計ることが出来るが、同時に詩句を発音するものの発声器官への満足、すなわち主観によって判断されるものであることが明らかになった。

第3章では、ヴェルレーヌの詩に見られる音楽性が作曲にどのように生かされているかを探り、効果的な演奏方法について考察した。その結果、ドビュッシーがフランス語の抑揚に忠実な作曲方法、すなわち律動強張音と強拍及び最高音の一致によって、言葉の抑揚にきわめて近い旋律を生み出したこと、ヴェルレーヌが詩で行った母音や子音を印象的に響かせる工夫を音楽でも効果的に再現したことが確認された。また、ピアノ・パートは単純な伴奏という枠を超越した重要な役割を担っており、ある時は歌の旋律に先立って詩の情景を描き、またある時は歌との対話を担うことで、歌曲の世界を完成させている。そして、筆者がこれらの作品を演奏する際に時折感じていた、漠然とした「足場の不安定さ」、「重みのかけられない繊細な旋律」という印象が、ヴェルレーヌの詩の特性である、「不安定な足場の上に成り立つ音楽的な詩」というキーワードを得たことで、詩と音楽の特質の融合という結論を導き出すに至った。この結論は筆者の演奏解釈に更なる裏付けと確信をもたらすものとなった。

ヴェルレーヌは音楽的な詩、すなわち歌うような詩を目指して詩作を行ったが、それに対してドビュッシーは、各詩の世界を的確に音楽で表現し、言葉の抑揚を徹底的に尊重することで、語るような音楽を生み出した。このことから、両者の芸術の本質が、最も深いところで牽引しあっているという結論が導き出された。

(総合審査結果の要旨)

本論文は「ヴェルレーヌの誌によるドビュッシーの歌謡作品 ― 詩と音楽性の関わり ― 」と題して、第一章でフランス歌曲の歴史を追い、フランス近代歌曲までの流れをたどった。

ドビュッシーやヴェルレーヌの生涯と二人の関わりを探り、ヴェルレーヌの詩を分析、音楽的とされたその詩の「音楽性」を解明しようと試みた。

それは「反復語」「リズム」「音を感じさせる言葉(雨、風、etc)」あるいはただ単に発音するときに心地よいことなどを声楽家としての感性から感じ取っているが、その後に「音楽性」の内容について特筆が不足していることは、副題としているだけに物足りない感が残った。

しかし二年間のフランス留学の結果として深い詩の解釈や詩法に及ぶ分析は真摯な研究として評価できる。

特に付録として「詩の音節集、発音記号及び日本語訳」などドビュッシーの17曲に独自の研究を加えているが、実践的な資料として役立つものとする。

よくまとまっていて無駄をはぶいた演奏家として説得力のある論文といえる。

演奏審査会においては、「ドビュッシーの世界」と題し、印象派の詩人、それぞれ色彩の異なる、ボードレール「五つの詩」、ヴェルレーヌ「忘れられた小唄」、マラルメ「三つの詩」が演奏された。

ドビュッシーの三つの時代を歌い分ける低音から高音までの広い音域を要求され、音楽的にも多様な

色とニュアンスを必要とする、難しいが魅力的なプログラムを自然でまっすぐな音楽性で情緒豊かに表現した。

特に中音域の安定感とフランス語の美しさによって、まさに論文の「詩と音楽性の関わり」を実践した高い水準の演奏であった。

結果、学位取得「合格」とする。